

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

インタビュー・プロジェクト『ときめき取材記』実践報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学留学生別科 公開日: 2025-04-11 キーワード (Ja): 上級, 仲介, インタビュー, 複文化・複言語 キーワード (En): 作成者: 永富, あゆみ, 友宗, 朋美 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学, 関西外国語大学非常勤
URL	https://kansaigaidai.repo.nii.ac.jp/records/2000341

インタビュー・プロジェクト『ときめき取材記』実践報告

永富 あゆみ

友宗 朋美

要旨

関西外国語大学留学生別科の総合日本語クラス最上級レベル Japanese 8 では、学習者の日本語能力や背景の多様化が特に顕著である。そのため、時事問題を扱う一斉授業に加え、個別対応可能な部分の拡充が求められる。2024 年春学期は、各自、インタビュー・プロジェクトとして、専門分野や興味のある分野で活躍する人物にインタビューを実施し、その内容を記事にまとめ、国際文化フォーラムの『ときめき取材記』に投稿した。複文化・複言語間の仲介役として日本語能力を社会に還元し得るプロジェクトでもあり、大きな学びの機会となった。ただ、時間配分やインタビューの負担といった課題に対しては、プロジェクト選択制やグループインタビューの導入を検討する必要がある。

【キーワード】 上級、仲介、インタビュー、複文化・複言語

1. はじめに

関西外国語大学留学生別科（以下、別科）の総合日本語クラスの最上級レベルである Japanese 8（以下、J8）履修者の日本語学習歴やその背景は多様である。継承日本語学習者、高校時代に留学を経験した者、日本語能力試験 N1 合格者などが混在し、単に「最上級レベル」として一括りにはできない。時事問題を扱うディスカッションで難なく学部生と議論できても日本の小学校レベルの漢字が読めない、また、本人も読み書きは重視していない、といったケースもあり、日本語能力とニーズは十人十色である。したがって、一斉授業に加えて個別対応の部分の拡充することによって、それぞれの学びを支援しなければならない。本稿では、その個別対応部分に焦点を当て、2024 年春学期の J8 におけるインタビュー・プロジェクトの実践を報告し、今後

の課題を述べる。

2. 2024 年春学期 J8 の概要

2.1 到達目標

別科統一シラバス掲載の到達目標を表 1 に示す。

表 1

<p>By the end of the course, students will be able to:</p> <ol style="list-style-type: none">1. Fluently express persuasive opinions, selecting appropriate expressions from a variety of language resources, including grammar at the level of JLPT N1 and vocabulary at the levels of JLPT N1/N2, according to the situation and audience.2. Accurately grasp the critical points of various social issues discussed in news programs and other sources.3. Collect relevant information on social issues and present it concisely and effectively.4. Understand and respect the logical reasoning behind opinions that differ from their own, actively participating in discussions while maintaining effective communication.

到達目標 2.以降は時事問題を中心に展開する授業で意識され得るが、1.で言及されている「場面や相手に応じて様々な表現の中から適切なものを選択する」能力をつけるためには、大学生以外との接触場面のある活動も求められることがわかる。

2.2 時間割

一週間あたり 90 分授業 3 コマ、祝日を含め 16 週間からなる一学期の中で、一斉授業の中心は、時事問題とディスカッション、関連トピックの意見文の書き方となっている。インタビュー・プロジェクトのためには、概ね二週間に一度、一斉授業コマ時間を一人 15～20 分の個別面談に充て、相談やフィードバックを行った。ただし、準備の留意点や報告会など、全体共有が望ましい内容は、一斉授業コマ内で扱った。

2.3 学習者

計 18 名を 9 名ずつのセッションにわけて開講した。別科履修歴は表 2 のとおりで

ある。

表 2

2024 年春学期のみ	5 名
二学期継続履修者	
J8 継続 (J8 は二学期履修可能)	
2023 年秋学期・2024 年春学期	5 名
2024 年春学期・2024 年秋学期	2 名
J7 から	5 名
J6 から	1 名

関西外国語大学編入者 1 名以外は、アジア圏、北米、ヨーロッパに位置する原籍大学の学部生で、専攻・副専攻についても、英語・英文学、国際関係、メディアデザイン、日本語・日本研究、経営学・経営工学・ビジネス、美術、翻訳・通訳、コンピューターサイエンス、生物化学、広告・放送、数学など、多岐にわたる。

日本語に関しては、継承語として学ぶ者 5 名、日本語能力試験合格者は N1、N2 がそれぞれ 3 名、4 名となっている。学期開始時の日本語学習歴・ニーズ調査では、漢字・読解やあらたまった場面での言葉づかいに自信がないという声が目立ったが、各自、Kanji & Readings クラス、Business Japanese クラスなどの選択科目の同時履修で補っていた。一方で、専門分野の英語開講クラスに時間を割きたい、教室外で日本でしかできない経験を重視する、日本語能力試験に興味はない、といった意見もあり、日本語能力の向上が必ずしも最優先だったわけではない。

このように、学習者の背景は多様であるが、共通点として浮かび上がってきたことにも言及したい。それは、日常会話には苦労しないものの専門分野においては知識も経験も自信がないこと、留学先だからこそ得られる「表層的な日本」以上の体験を求めていること、他レベルの学習者に頼られ「直接の対話が成立しない者同士のコミュニケーションをつなぐ (松岡 2024)」機会が少なくないこと、である。

専門分野ではまだまだといえども、コミュニケーションの仲介ができることに誇りを感じ、言語や文化の違いから生じる様々な事象について「表層的」な部分で納得せず、お互いの意見や経験を話し合う機会を歓迎する様子は、個別面談時にもうかがえた。本人の努力もさることながら様々な条件に恵まれて J8 というレベルに到達したことを自覚しており、社会に還元・貢献したいという意識も高かった。

3. インタビュー・プロジェクト選択

3.1 CEFR-CV「仲介」

櫻井・奥村（2024）は、*Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment* (Council of Europe 2001, 以下 CEFR) とその補遺版 *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment — Companion volume* (Council of Europe 2020, 以下 CEFR-CV) を比較し、大幅に更新された「仲介」が、「学習活動の背後にある文化、社会を理解することを通して、学習者自身の複言語・複文化能力の育成へとつながるものである」と述べている。そして、第三者にテキストの内容を伝達する「テキストの仲介」、意味構築に向けて協働する「概念の仲介」、文化的な違いから生じるコミュニケーションの障壁を乗り越えるために参加者間の理解を広げ深める「コミュニケーションの仲介」といった仲介活動をまとめている。さらに、仲介活動を円滑に進めるために、言語的、文化的、社会的背景を考えながら、話し手・書き手についての理解を図る、聞き手・読み手のためにテキストを作り替えるなどの方略が示されていることも強調している。

複言語・複文化のはざままで「仲介」役となることの少なくない J8 履修者は、既にこのような仲介活動と方略の必要性を実感していることは想像に難くない。そこで、それぞれのニーズに合った形で、専門分野や興味のある分野において、仲介活動を通し、何らかの形で社会に還元していく、日本に留学しているからこそできるプロジェクトを検討した。応援したいその道のプロにインタビューし、記事にまとめて発信する形であれば、2.1. で言及した大学生以外との接触場面において、仲介方略を駆使し、言語的、文化的、社会的背景を考えながらインタビュー相手（以下、インタビューイ）についての理解を図り、協働で意味構築をしていき、不特定多数の読み手を想定してインタビュー記事を完成する仲介活動となり得る。具体的には、公益財団法人国際文化フォーラム（以下 TJF）と日本語教育機関が連携して取り組むインタビュー・プロジェクト『ときめき取材記』への参加である。

3.2 ときめき取材記

三代・千葉（2021）は、『ときめき取材記』の目的を大きく二つにまとめ、①社会を知る（一人ひとりの語りに耳を傾けることで、多様で変わり続ける社会が見えてく

る)、②社会をつくる(社会にメッセージを届けるという活動から、社会の担い手、社会をつくる参加者の一人としての自覚を感じてほしい)としている。

複言語・複文化間の仲介経験を持つ学習者であれば、インタビュー・プロジェクトを通し、ステレオタイプのイメージにとらわれないメッセージを伝え、自らが波及効果をもたらす原動力となる意識が持てよう。また、『ときめき取材記』の他参加機関の様々な分野の過去記事を見れば、目指す成果物も明らかである。さらに、時事問題に関するかたい書き言葉での意見文一辺倒の者にとっては、不特定多数の読み手を意識して専門用語をわかりやすく説明する練習となる。一方で、読み書きに苦手意識のある学習者も、比較的平易な話し言葉の記事に安心感をおぼえたと考えられた。

4. インタビュー・プロジェクトの流れ

4.1 第1～2週(オリエンテーション、企画案)

まず、当該学期に初めて同じ教室で学ぶ相手とのペアワークでインタビューし合った内容をまとめ、クラス全体の前で他己紹介をウォーミング・アップとした。長文を書くことに抵抗のある学習者も考慮し、ワードではなくパワーポイントでのまとめを指定した。他己紹介後、インタビューの魅力伝えるために留意すべき点を全体で話し合った。その上で、インタビュー・プロジェクトの概要説明に入った。

その後、各自、企画案として、インタビュー候補者2～3名の概要をパワーポイントのスライドにまとめる作業を開始した。候補者選定時の留意事項は、自分の専門や興味のある分野に深く関わっている人、魅力を多くの人に知らしめたい人、日本語でインタビューが実施可能な人(学習者自身より日本語能力が高ければ、日本語が第一言語である必要はない)、できる限り対面でのインタビューが可能な人、過去に接触のなかった人、である。この段階では、インタビューを承諾してもらえる可能性は考えず、話をきいてみたいという熱意を優先させた。ただ、紹介記事で終わらないよう、インタビュー記事の読み手からどのような波及効果が期待できるかも言及することとした。

4.2 第3～4週(企画書完成、メールの書き方、下調べ)

個別面談で企画案を参照しながら、インタビューの第一候補者の決定作業に入り、企画書を完成する。この時点から、インタビューを承諾してもらえる可能性、依頼の

ための連絡先が入手できそうかなど、より現実的に検討していく。同じような分野でのインタビューを希望していたことから、協働での実施企画を決めたペアも 2 組いる。

インタビュー決定後は、依頼メールの書き方を確認した。一斉授業時に、適切な例と不適切な例を比較し、注意すべき点を整理した上で、自分のメール案を修正する作業を行った。ビジネスパートナーではなく、留学生としてその道のプロに教えを乞う立場であることに注意しつつ、**Business Japanese** 同時履修者の提案を活かした。修正メールに教員の許可がおり次第、インタビューとの連絡開始となる。

インタビューからの返信待ちの期間は、インタビュー当日に向けての準備もした。まず、事前準備なしで教員相手の模擬インタビューを体験してもらい、下調べと質問準備が不可欠であると強調した。加えて、撮影や録音の承諾のとり方といった当日の留意事項も確認する。

この時点で、第 11 週の報告会の形式も説明しておき、インタビュー後、記憶が鮮明なうちにメモを残すよう促した。録音した音源は何度でも確認できるとはいえ、実施時にインパクトのあったことが記事の中心となる可能性が高いからである。

4.3 第 5～8 週（インタビュー開始、フォローアップ）

各学習者のプロジェクト進捗状況に応じ、個別面談時に返信へのお礼・日時決定メール、質問文リスト、候補者の変更などのフォローアップを行う。第 8 週の別科春休み期間前後にインタビューを実施する者が多かった。

4.4 第 9～11 週（報告会）

インタビュー終了次第、報告会の準備に入る。資料作りが大きな負担とならないよう、また、そのまま初稿に活かせるよう、企画書のパワーポイントを表 3 のようにまとめることとした。

各自 5～10 分程度で実施インタビューを報告し、質疑応答時に出てきた発言から、記事に含めたい部分、その中心となる部分、書き起こして確認する必要のある部分、構成、写真の使い方などを検討し、初稿に着手する。

表 3

- ① 記事のタイトル、実施者名、実施日、場所
- ② インタビュー者のプロフィールと写真
- ③ インタビュー者を選んだ理由（何を読み手に伝えたいと考えたか）
- ④ 紹介したい発言の引用
- ⑤ 印象的だった点
- ⑥ 意外・予想外だった点
- ⑦ 確認の必要な部分
- ⑧ その他感想

4.5 第 12～13（ゴールデンウィーク）～14 週（初稿）

報告会で得たフィードバックを踏まえ、字数制限などにとらわれず、まずは TJF 提供のテンプレートに入れてみるよう指示する。質問部分は短くまとめる一方で、インタビュー者の人生と言葉を預かり伝える責任を自覚し発言を勝手に改変しないよう注意した。

4.6 第 15～16 週（説明会、第二稿、最終稿）

初回説明会は、2 セクション合同とした。2～3 名の小グループで着席し、初稿を見せながら 5 分程度で内容を説明し合う。同席者全員の説明が終わり次第、グループ編成を変えていく。別セクションの学習者にとってはインタビュー内容が初見であることを踏まえ、不特定多数の読み手に伝わりにくい可能性のある部分を洗い出し、第二稿として整えていった。

次の説明会は、日本語を第一言語とする学部生をゲスト招待し、ポスター発表形式で実施した。初回説明会でインタビュー内容の紹介にも自信をつけてきており、第二稿の拡大コピーを活用しながら、よりわかりやすい記事になるよう、助言を求める様子が見られた。

これらの説明会后、修正を経たものを最終稿とし、教員が掲載可否の打診メールとともにインタビュー者へ送信した。承認された場合、学習者からお礼メールの送信を行う。最終稿を成績に反映させ、TJF への投稿（最終稿、インタビュー者の掲載承認

メール、写真)は学期終了後となった。

5. 考察・課題

5.1 時間制限

TJF に投稿するまでに至らず学期終了となったため、まず、初稿提出締切を早めるべきであろう。特に、インタビューからの修正要請に関してやりとりを重ね、発言の意図と表現との齟齬から学び、記事を完成させていく過程に時間がとれなかった。早くから最終稿を完成していた学習者は、インタビューの提案から多くを学んだようだが、学期末の他クラスの課題もあいまって、熟考せず提案通り体裁を整えたとしきものもあることは否定できない。むしろ、全員揃うのを待たず、準備が整い次第 TJF に投稿しておけば、実際に掲載されたクラスメイトの記事を目にすることもでき、さらなる動機づけとなった可能性もある。いずれにせよ、TJF 投稿後も、写真データ等の確認、掲載を知らせるインタビューへのお礼メール送信等、作業が続くため、インタビュー・プロジェクトのふりかえりの時間が確保できなかった。

初稿提出を早めるためには、企画段階の短縮とインタビュー実施時期の繰り上げも必要となる。ただ、ある程度の余裕は残さねばなるまい。まず、各学生の専門分野やニーズについて対話を重ねてインタビュー候補を検討していく時間は削れない。また、学期開始時に欠席者や遅刻者がいることも想定し、企画案不備の場合のフォローアップが可能なゆとりも残すべきであろう。さらに、企画書の完成が一律に早まったとしても、インタビューが承諾されるかどうか、また、そのような返信がすぐに入るかどうかは学習者側でコントロールできることではない。

5.2 インタビューーの負担

前述のように時間配分を変えるにしても、春休みやゴールデンウィーク前などを考慮すると、インタビュー実施可能期間が短いことに変わりはない。憧れのインタビューーから承諾を得たものの、日程調整がうまくいかず、あきらめざるを得なかったケースもあるが、多忙なインタビューーにとって時間的な負担は大きい。

また、日本語学習者に不慣れなインタビューーであれば、最終稿の確認も容易ではない。日本語学習者相手に言葉を選びながら発言したものの活字になると違和感がある、専門分野での活動は他言語ゆえ自然な日本語訳に自信がない、一生懸命書かれ

たものを尊重したいがどこまで修正をお願いしていいものだろうか、というように、学習者への気遣いから、最終稿の確認にも時間を要することがうかがえた。

5.3 交通費等

オンライン実施から他府県での対面インタビューまで、インタビュー実施に係る交通費も様々であった。また、交通機関の遅延によりタクシーに頼らざるを得ず、大きな出費となった者もいる。しかし、何らかの助成金が得られるとしても、インタビューから承諾を得るまで実施日も交通費も確定しないため、一律の補助は難しい。別科選択科目のプロジェクトや『ときめき取材記』他参加大学と同様に、オリエンテーション時に交通費負担がないことを明言する必要があるが、それによってインタビュー候補検討の幅が狭まる懸念もある。

6. おわりに

前述のように、ふりかえりの時間が確保できないまま学期終了となったものの、インタビュー・プロジェクトならではの学びがあったことを記しておきたい。

インタビュー記事の最後に掲載されている取材者としてのコメントは、全力で最善を尽くし夢を成し遂げたインタビューーへの尊敬の念、そしてそのようなロールモデルとの出会いへの感謝の気持ちを明らかにしている。学習者自身ではよくわかっていると思っていたことについても、新たな視点を得て触発され、今後のキャリア展望が広がったようである。クラスメイトのインタビューーの助言がきっかけで勉強方法を工夫した結果、ほどなく日本語能力試験 N1 に合格した学習者も出た。2024 年秋学期の J8 継続履修生の中には、反省点を踏まえた上でよりよいインタビュー記事を通してインタビューーの言葉を多くの人に届けたい、と熱意を見せる者もあり、「仲介」役としての意義も実感できたと思われる。

また、学内外のインタビューー側から、多様な背景を持つ学習者とのやりとりは新鮮であったとの声も寄せられており、別科のプレゼンス認知の一助となったと言えよう。担当教員自身にとっても、学習者支援の過程で学内外のネットワークが広がったことは、今後の教材開発で幅広い時事問題を扱うためにも有意義であった。

一方、長期休暇をはさむ 16 週間の中では、コースの一部としての展開に多くの課題がある。インタビュー・プロジェクトをコースの中心とし、時事問題についてはイ

インタビュー候補と関連性のあるトピックに限定する、という設計も可能であろう。ただ、時事問題中心展開時とは異なり、その学期の履修者のニーズを踏まえた柔軟性ある支援が難しくなる恐れもある。そこで、二つの可能性を検討する。

一つ目は、J8 のプロジェクト内容を選択制にし、インタビュー・プロジェクトをその選択肢に含める案である。特に、二学期継続しての J8 履修生であれば、企画案から TJF 投稿以降掲載まで、しっかりと検討を重ね、「仲介」の責務を果たせ、成果物としての記事にも誇りが持てるのではないだろうか。また、学部開講の授業に興味を持つ者もいることから、広報部と連携し、THE GAIDAI（関西外大通信）の教員インタビュー記事への関与も視野に入れたい。

二つ目は、コースの一部としての位置付けはそのままに、グループ単位でインタビューを行う方法である。まず、専門分野で大まかなグループにわかれ、インタビュー候補選定段階で個人プロジェクト希望者が離脱していけばよい。グループワークのための時間捻出を懸念する声、また、日本語能力や専門分野に幅があることから、当該学期は、協働を禁止するものではないが基本的には個人プロジェクトである、とした。前述のように、当初から協働企画の者もいる。また、インタビュー候補者都合で急遽協働となったケースもある。確かに、学習者間の連携に苦勞もうかがえたが、個人プロジェクトとは異なり、緊張した空気の中で会話・録音・撮影のマルチタスクを一人で行う必要はなかった。誰かが欠席しても補い合え、お互いの得意分野を活かしつつ役割を分担すれば安心感もあろう。インタビュー候補者の数が限定されれば、教員も余裕を持って支援にあたれるという利点もある。

以上は、あくまでも、別科総合日本語の枠内での案にすぎない。インタビュー・プロジェクト中心の展開であれば、選択科目としての開講の可能性も示唆したい。ビジネスメールなどの目上の人とのやりとりが不可欠であるため、**Business Japanese** との統合コースも考えられる。他にも、学部生と協働プロジェクトを行うコースとしての開講も検討の余地があると思われる。

謝辞

公益財団法人国際文化フォーラム（TJF）の千葉美由紀氏には、学期開始前から終了以降も、ご指導ご鞭撻を賜りました。関西外国語大学においても、香西壮一先生、

福田和生先生、韓恵盛先生、米村明美先生、土谷彰宏氏、松本泉氏にお力添えいただきましたこと、深く感謝しております。また、本プロジェクトにご協力くださったすべてのインタビュー어의皆様に心よりお礼申し上げます。

参考文献

関西外国語大学『THE GAIDAI（関西外大通信）

<https://www.kansaigaidai.ac.jp/info/outline/newspaper/>（2025年1月11日）

国際文化フォーラム『ときめき取材記』<https://www.tjf.or.jp/tokimeki/>（2025年1月11日）

櫻井直子，奥村三菜子（2024）『CEFR-CV とことばの教育』くろしお出版

松岡洋子（2024）「日本語教育は多文化社会の防災・減災に貢献できるか」『2024年度日本語教育学会秋季大会予稿集』，168-173.

三代純平，千葉美由紀（2021）「ひととひと・ひとと社会をつなぐインタビュー — 学生たちが挑戦する「ときめき取材記」プロジェクト」北出慶子，島津百代，三代純平（編）『ナラティブでひらく言語教育—理論と実践』 第11章，新曜社，149-158.

Council of Europe. (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. <https://rm.coe.int/1680459f97>（2025年1月11日）

Council of Europe. (2020). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment — Companion volume*. <https://rm.coe.int/common-european-framework-of-reference-for-languages-learning-teaching/16809ea0d4>（2025年1月11日）

(anagatom@kansaigaidai.ac.jp)